

ふくいユーニアム

平成23年度特別展

2011.3.30 No. 42

鉄道博覧会

日本と福井の鉄道のあゆみ

今年の夏、
歴史博物館が鉄道一色になります！

夏休み、家族で乗ったあの電車。青々とした田んぼの中をゴトゴトと走って行ったあの電車。

私たちの心の中には、必ずと言ってよいほど鉄道の風景があると思います。

県立歴史博物館では、今夏、地方博物館としては最大規模の鉄道展を開催いたします。皆さんも鉄道の歴史を見ながら、懐かしいあの頃を思い出してみませんか？

それでは、現在進んでいる企画の概要について展覧会の内容に沿ってご紹介いたします。

第一部 鉄道の歴史

1 鉄道との出会い

明治5年に新橋～横浜間で日本最初の鉄道が開通したことは、多くの方がご存じだと思います。そのため、日本人が鉄道の知識を得たのは明治時代に入ってからのことと思われがちですが、実は幕末には一部の日本人の間で、外国に蒸気機関車が存在することが知られていましたし、その影響を受けて国内で蒸気機関車の研究を行う人もいました。展覧会の導入部として本コーナーでは、日本人と鉄道の出会いについて、歴史資料や模型を通して紹介します。



『遠西奇器術』より



昭和25年時刻表

2 鉄道開通

明治5年6月の品川～横浜間の仮開業、そして9月の新橋～横浜間の正式開業について、布告や時刻表、鉄道錦絵などを通じて紹介します。

3 伸びゆく鉄道

当初、国内には鉄道の建設に反対する人々も多く居ましたが、実際に鉄道が開通しその利便性を理解すると、そうした声は無くなり鉄道路線が全国へと伸びていきます。当初は、日本鉄道や山陽鉄道に代表されるように私鉄を中心に路線網が形成されましたが、明治39年の鉄道国有法により大手私鉄が国有化されていき、やがて昭和10年代の戦前の鉄道黄金時代へと向かいます。本コーナーでは日本全国に鉄道が伸びていく様子を解説します。

4 戦争・占領と鉄道

日中戦争を経て太平洋戦争が始まると、鉄道輸送は軍事優先に変わり、本土が空襲にさらされるようになると、軍事輸送を担っていた鉄道は空襲の大きな目標になり、

多くの鉄道施設が被害を受けました。そして、昭和20年8月に日本の敗戦により戦争は終わりましたが、終戦は鉄道にとって決して安泰な出来事ではありませんでした。米国を中心とした進駐軍は、日本占領と同時に鉄道輸送を掌握し、進駐軍専用列車を走らせるなど、占領政策に積極的に鉄道を利用していきます。これは昭和26年9月のサンフランシスコ講和条約まで続きます。今回の展示では、今までの鉄道展ではほとんど顧みられることがなかった、鉄道と戦争についても積極的に紹介します。

5 鉄道の近代化と黄金時代

昭和20年代後半になると戦後の復興も進み、鉄道も戦前の水準を取り戻すと同時に、近代化を進め客車中心から電車中心の運用へと変化しました。また、経済成長とともに旅客が激増し、それに対応するため全国に準急、急行、特急網を張り巡らしました。本コーナーでは、昭和20年代後半～30年代を中心とした戦後の鉄道黄金時代について解説します。

6 新幹線の時代

戦後における鉄道の集大成として新幹線が昭和39年に登場しますが、新幹線計画の前段階として戦前に東京～下関間の弾丸列車計画がありました。本コーナーでは、この2つの高速列車計画が密接に結びついていることを解説します。

第二部 福井の鉄道

1 北陸・小浜線の敷設

明治15年に長浜～敦賀間が開通し、その後、福井およびそれ以东への路線を延ばした北陸線と、大正11年に全通した小浜線の歴史、また計画のみに終わってしまった東北鉄道会社や加越電気鉄道、金城鉄道などについても紹介します。

2 北陸本線の興盛

北陸の大動脈である北陸本線は、当初は単線であり、しかも福井県内には柳ヶ瀬越えと山中越えの2つの難

所がありました。そのため輸送量も限られており、その改善が課題でした。本コーナーでは、北陸本線の改良と近代化、そして優等列車網の構築について解説します。

3 私鉄の盛衰

北陸本線を背骨とすると、そこから肋骨のように伸びる私鉄が福井には多数ありました。残念ながら、その多くは現在では廃線となってしまい見ることはできません。県内に細かく張り巡らされていた私鉄の鉄道網についてご紹介します。



戦前の福井駅駅弁掛紙

第三部 鉄道の旅

列車の高速化と共に鉄道旅行の楽しみも減ってしまいましたが、かつての鉄道旅行には駅弁を買ったり、食堂車で食事をしたり様々な楽しみがありました。第三部では、様々な切符や食堂車のメニュー、食堂車の模型などから鉄道の旅の楽しさについて紹介します。また、当館が誇る明治～昭和の駅弁掛紙5000枚のコレクションの一部も展示いたします。

第四部 懐かしの鉄道写真

旧北陸本線山中峠越え、福井鉄道鯖浦線・南越線、京福電鉄丸岡線・永平寺線、D51型蒸気機関車、DD50型ディーゼル機関車、ディーゼル特急「白鳥」号など、福井県内の鉄道や、福井では見られなかった国鉄車両など、懐かしい昭和30年代、40年代の鉄道写真がご覧になれます。(期間中に数回の展示替えがあります)

第五部 鉄道模型と鉄道切手

鉄道と言えば、鉄道模型が頭に浮かびますが、鉄道模型にも歴史があります。オープン収蔵庫では、戦後の鉄道模型の歴史をご紹介しますとともに、鉄道が描かれた日本切手の原画を展示し、鉄道にまつわる遊びの世界をご紹介します。

(水村 伸行)

開催期間

平成23年 7月1日(金)～8月31日(水)

開催場所

福井県立歴史博物館

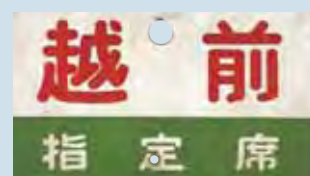
観覧料

※()は団体料金

一般 / 400円(320)

大高生 / 300円(240)

中小生 / 200円(160)



華南三彩 花樹紋盤

16世紀から17世紀は日本が中世から近世に移行する大変革の時期、工芸とりわけ陶磁器は大きな発展を遂げ、桃山陶磁に代表される華やかな時期を迎えました。そんな時代の息吹を感じさせる逸品を紹介します。

華南三彩は中国南方で焼かれたものです。また、製品の積み出し港名から「交趾三彩」とも呼ばれます。資料は口径29.6cm×高さ6.4cmの盤(大皿)です。口縁を鏝(つば)状に外反させ、端部は輪花形に切り、底面は高台を刻まず板状です。明灰色系の胎土を用い、内面には花樹紋を手早い筆致で線刻しています。釉の発色をよくするため白土を下地塗りし、内外面全体に緑釉を掛け、口縁・紋様部に黄・茶色釉を掛けていますが、底部は露胎(無釉)です。口縁及び体部に4カ所に割れ・ヒビの補修がありますが、ほぼ完全な姿を留めています。

底面を無釉で板状とするのは盤のなかでは古い形態を示すことから製作時期は、16世紀後半と考えられます。

華南三彩は、そのデザイン・色調等日本の陶磁器に多大な影響を与えました。まず器の口縁部分を見てみましょう。周囲に鏝状の部分を持ち、鏝の先端は花形に切られ、極めて装飾的です。呉須手(漳州窯系)の大皿では段を付け、外反させたデザインが多くみられます。また、景徳鎮系の鉢類で口縁を鏝状とし、先端を花形に切ったいわゆる兜鉢とも共通します。この装飾的で粋なデザインを最初に取り込んだ日本の陶器として美濃製の「黄瀬戸」があげられます。鏝状の口縁の他、文様を線刻や印で描くことや、線刻文様部分に別色の釉薬を掛ける(タンパン)手法など華南三彩との共通点を見いだすことができます。

また、華南三彩の鮮やかな緑色から思い出される日本の陶器として、「織部焼」が挙げられます。織部焼には緑釉と白抜き部分を効果的にデザインする「青織部」のほか、全体に緑釉一色の「総織部」では、鏝状の口縁や線刻文様など華南三彩そっくりなデザインもみられます。さらに、時代は若干下がりますが、古九谷様式の緑色も「緑大好き」な当時の日本人共通の志向だったのかも知れません。

ところで、わびの極地といわれる「楽焼」と華南三彩との関係を御存知でしょうか？実は、楽焼初代長次郎は交趾焼の職人という説があります。広義の楽焼といえる「軟質施釉陶器」は緑・黄・黒の各色や、透明釉で胎土の赤や白も取り込み、多彩さを武器としました。これらの色は華南三彩とも共通します。このうち黒と赤(透明釉)に特化したのが「楽焼」といえるでしょう。しかし、長次郎の作例には華南三彩を写した「三彩瓜紋平鉢」(東京国立博物館蔵)が知られており、天正2年(1574)銘「獅子瓦」(楽美術館蔵)を含め、「色」の焼き物が本来であったことをうかがわせます。

華南三彩盤の普及状況を考古学成果に求めると、京・大坂をはじめ各地の織豊期の都市遺跡から出土しており、人気の高さが伺えます。しかし、越前随一の都市・福井城跡(北庄城跡)では現在のところみつかっていません。

華麗な桃山の陶芸界で重要な位置を占める華南三彩。本品はその典型作例として、貴重な資料といえるでしょう。

(河村 健史)



昭和戦前期の敦賀町写真綴り

本資料は、「敦賀町全景」をはじめとする83枚の写真が綴られたもので、表紙に「市制施行ニ関スル上申書添付写真」と書かれています。

敦賀町は、昭和12年(1937)4月1日に、松原村を合併し、県内では福井市について2番目の市となったところです。表題にあるように、敦賀町が市制施行を内務省に上申した際の添付書類として作成されたのがこの写真綴りです。このことから、これらの写真は昭和11~12年ころに撮影されたものと思われます。内訳は、敦賀町役場など官公舎建物19枚、敦賀駅や郵便局など交通通信施設9枚、敦賀港栈橋など港湾関係施設12枚、敦賀商業高等学校など学校関係10枚、東洋紡績敦賀工場など企業関係6枚、気比神宮など寺社関係12枚、気比松原など名所旧跡4枚、敦賀駅前通りなど町の景観11枚です。

この時期の敦賀町に関する写真は、これまでに敦賀市が発刊した『市制50周年記念写真集 ふるさと敦賀の回想』(昭和62年刊)や当館が所蔵する写真絵葉書などから確認されていますが、ここに綴られた写真は、それらと同一のものは1枚もありません。もちろん、建物や風景は同じものですが、撮影角度が異なっています。そういう意味では、すべて新たに確認された写真といえます。

この時期の敦賀港は、第一次世界大戦を契機として対岸貿易が盛んになり、昭和7年には第二次港湾修築工事も完成し、国際貿易港として発展を遂げていました。この写真綴りにも敦賀港に関連する写真が数多くみられます。大型貨物船が停泊している栈橋や新岸壁、輸出入貨物を保管する町営の倉庫群、敦賀税関支署や検疫所・家畜検査所などの港湾施設、また、昭和8年に移転新築されたソビエト敦賀領事館の写真も含まれています。さらに、敦賀港新岸壁に連絡する臨港引込線の敦賀港駅や敦賀新港駅の駅舎写真などもあり、港湾都市として栄えた当時の敦賀の姿をビジュアルに知ることができます。

現在の敦賀市街には、戦前期にあった建物の多くが昭和20年の空襲で焼失したため、現存するものはほとんどありません。往時の敦賀市街を再現する上では、これまでに確認された写真に加えて、これらの写真が貴重な資料となります。

近年、こうしたいわゆる古写真が多様な情報を提供してくれる歴史資料として、歴史・民俗・社会・建築などの様々な分野での利用価値が認められて、県内でも多くの機関で古写真のデジタルデータ保存が進められています。当館でも、写真資料を地域の歴史を伝える貴重な歴史資料として、今後も調査・収集を継続していきたいと考えます。

(山形 裕之)



表紙



ソビエト連邦敦賀領事館



敦賀港新岸壁



敦賀港駅

CIC宛て書簡

これらの資料は、昭和22年(1947)に福井に駐留した米軍人、ジョセフ・D・ケリー(Joseph D Kelly)氏が、福井滞在中に入手し米国に持ち帰ったものの一部です。封書とハガキが各1点あり、それぞれ別の発信人から、当時福井に進駐していたCIC(Counter Intelligence Corps: 対敵防諜支隊)の隊長を務めていたケリー氏宛てに出されたものです。

封書(資料1)は、切手が剥がされているため消印は読み取れません。本文(割愛)は、わら半紙3枚に鉛筆で記されており、発信人が三国警察署によって調査されていることについて、自分が危険人物ではないことを釈明し、あわせて占領軍への協力を申し出る内容です。

ハガキ(資料2)は、昭和22年6月14日の消印が確認できます。発信人は書かれていません。坂井郡での選挙結果(同年4月30日の県議会選挙か)に関して公職追放対象者の当選を指摘する内容が記されています。表に英文タイプで「Letter concerning the expulsion of ***** , **** & ***** , ***** .」(****、***の追放を懸念する手紙、の意か。なお、***は個人名)と打たれています。CIC内で、通信の内容を示すメモでしょう。

さて、これらの宛先であるCICは、正式には“441st Counter Intelligence Corps: 第441 対敵防諜支隊”といえます。昭和20年10月にGHQ/SCAP(連合国軍最高司令官総司令部)の発足とともに設置されたCIS (Civil

Intelligence Section: 民間諜報局)に置かれ、G-2(参謀第2部)に連なっていました。原則として都道府県ごとに配置され、そのおもな任務は、占領軍への妨害行為の取り締まりと治安維持に必要な情報収集でした。実務においては、日本の警察の協力を得たとされています。東条英機の逮捕や、公職追放、レッド・ページなどでの活動が知られています。

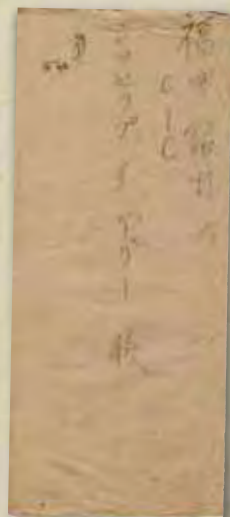
CICの県内での活動については、福井軍政部の進駐(昭和21年4月)に先立ち20年11月11日にジャクソン少尉以下7名が福井市に入り、福井銀行の一部を接收、調査活動に入ったとされます。しかし、現在のところその詳細は不明です。

そうしたなかで、本資料は、CICの県内での具体的な活動内容をうかがわせる資料といえます。資料1の本文には、CICが防諜の組織であること、隊長の階級が大尉であること、調査活動において三国警察署に指示を出していることが記されています。CICの活動について、当時、どの程度まで市民に知らされていたかは不明ですが、少なくとも調査対象者はそれを知ることができたようです。また、資料2からは、公職追放者の調査をCICが行っていること、CICが福井市佐佳枝上町に駐留していることが知られていたことがわかります。CICが市民による通報も、情報源として採用していたことを示す例といえるでしょう。

(瓜生 由起)

資料1

福井銀行内
C I C
ジョセフ
ケリー様



資料2

福井市佐佳枝上町
C I C 隊長殿

Letter concerning the expulsion of ***** , **** & ***** .



『記録簿』に見る儀礼と贈答

明治32年4月、坂井郡東十郷村河和田の縣(あがた)家では連日、他家の結納披露や嫁の「引越祝儀」に招かれ、招かれない日には婚家の三ヶ日礼回りや嫁の初戻りの土産をもらっていた。河和田は坂井平野の東よりの農村。ここにいつとき、華やかな祝いの時間が訪れたのである。

❁『記録簿』の仏事の記述

この様子を伝えているのは、河和田の頭分(かしらぶん)の一人だった縣甚助家の当主が明治26年から37年半ばまで書いた『記録簿』である。『新編坂井町誌通史編』の集落誌で、「日清・日露戦争で出征する応招者の見送り、戦死者の法会、赤痢の流行、台風・洪水・大火事の状況、北陸本線開通前の京都や東京への旅記録など多彩な内容が記載されている。」と紹介されている。

『記録簿』にこうした記事があることは確かであるが、項目数は全体の2割にもならない。明治32年夏の赤痢の流行についても、縣家の家族の罹患についてはかなり詳しいが、他家については「(姓名)事 赤痢病ニテ ヨ(陽暦)七月十二日 旧(旧暦)六月五日死亡 伝染病ニ付キ本葬セズ内葬セリ」のように、葬式とあわせて記述しており、年代記のような赤痢流行の記録にはなっていない。また縣家の項目のあとには、流行がおさまって本復祝に村中一同に赤飯を配ったこと、年末にとくに世話になった人に礼の品を配ったことが記されている。

『記録簿』は、「(姓名)亡父三回忌ニ付 ヨ九月廿三日 旧八月廿三日 餅五ツ貫ヒ 米八合斗 目三百五十五 尾引壱銭」や、「(姓名)父永ク病気候処 ヨ九月廿五日 旧八月廿六日 午後壱時死亡 葬式翌日 導師福井真宗寺(雨降り)米壱舂 金式銭 なす十三」のような法事や葬式に伴う贈答の記事が多い。

他家については上記のような簡潔なものであるが、「当家」についてはかなり詳しい。26年の祖母の「三十五日退夜(本来は「逮夜」)」では客の名と人数に献立、読経の内容、布施の金額まで記しており、「百日退夜」では餅を配った地区内の家の名と「尾引」の金額、地区外の人への香典返の相手先と内容、尾引の金額まで、煩瑣なほどに記録している。

ちなみに祖母の葬式の記述には会葬者の名や香典がなく、退夜より簡単である。縣氏のような家では葬式でも法会でも詳細な記録が別に作られるので、他家よりや

や詳しい程度にしたのであろうが、法事をより詳しくした理由は測りかねる。

それはともあれ、他家の仏事の記録は縣氏が香典をいかほど出し、白衣を着たり骨上や納骨に関わったか、葬家に「呼バレ」たかの記録で、「当家」、他家とも葬式や法事の内容はほとんどわからない。その点、婚姻の記述は仏事に比べて件数がないものの、やや詳しい。

❁規範的な婚姻成立の記述

婚姻でも「当家」については記録が詳細になる。31年5月に、妹としが丹生郡へ嫁いだ。3日に婿方の媒人2人が来て結納。夕方から11時まで「式ヲナシタ」。「引越」は5月22日で、道具運びがあり、「昼呼事」をして夕方家を出た。午後10時に嫁と当主、嫁の弟など客として招かれた7人が婚家へ到着し、夜通し「祝儀ノ式」をした。嫁方からさらに4人の親戚が行くべきであったが婿方の断りで行かなかつたと続く。25日には嫁の初戻りで婿方から嫁、義母、下男下女が来て、「当家」では主な親戚の主婦に迎えに出してもらった。このとき「五ヶ日戻りの印」として区内の22軒に赤飯を配った。29日には「初帰り」で母親と下男下女が送って行き、婚家やその親戚などへの土産を持参した。かなり厳格に儀礼、披露を行ったと思われるが、祝宴に親戚の出席を断ったり、双方とも嫁の膳は用意しないことにしたなどやや略した面もある。

「婿呼祝儀」は32年4月になって「向ノ請求」で行われた。婿方からは婿、婿の父親から下男2人まで含めて11人の客、「村客」は家族も含めて98人、他所の親類客は芸者、料理人を含めて17人。婿方の客には到着直後の昼過ぎから9時まで「本膳」「会席膳」「酒席」のもてなしをした。「賓客」には朱色、他所の客には黒の輪島膳を使い、村客は本膳の関係でイイを使い何回にも分けて振る舞いをした。「酒持チ」、アルキへの役酒、「直し金」は前日にすませ、当日は近所の頭分や親戚を手伝いに頼んだ。翌日は

婿への「膝直」と晩方には「骨折呼」で家族とも38人への振る舞いをし、特別手伝い人には後日米を贈っている。

「婿呼祝儀」の項目の最後に「委細ハ祝儀帳ニアリ」と記されており、結納、引越についても祝儀帳が作られ、献立や座敷の飾り、贈られた餞別や祝儀・酒肴料、「部屋見舞」の「万寿」も記載されているだろう。

🌸 略式の婚姻成立

としはこの地域の規範的な儀礼の流れで結婚した。他家の簡潔な記述でも同様な流れで行われたものが見られる。ただし儀礼がこのように行われるだけではない。26年の春に妹かのゑが大野郡井ノ口へ嫁いだときは、嫁婿とも再縁だから精々手軽にと約束してすべてが行われた。結納は婿方の親戚が持ってきたが膳部はなしのいわゆるナゲコミ。嫁の引越は母親が同行しただけで、6月になって道具送りをした。このときは家の代表も祝宴に出なかったことになる。さらに婚家への土産の干菓子の代金まで記されていないが、縣家から親戚や近隣の披露が全く記されていない。他家についての記述から、嫁の実家は結納の印に1合でも酒を配るものだったことがわかるが、それさえ書かれていない。頭分の家でも披露をしないことが許されたのだろうか。ちなみにこの結婚では婿入の記録もなく、33年になって初めて「婿の初年始」の文字が見られる。

葬送は乳児や異常死でないかぎりほぼ一定の方式で儀礼、贈答が行われるが、婚姻では儀礼がほとんど省かれる場合もある。かのゑの結婚もその一例と言えるが、他に「結納ニハ酒ヲ配ルベキノ処少モ印ヲナサザル也」と注記する例、結納の日に「結納呼」と「遣子呼(やりこよび)」をしてその晩に引越した例、他地区から嫁取りをしたが祝儀、「村觸舞(むらふるまい)」をせず1年後に「嫁広メ」をした例、養蚕時期に仮引越をして後に結納呼・遣子呼を合わせて行った例、父親の自死から40日ほどで、都合により嫁取りをし料理はすべて精進料理だった例など、規範的な儀礼・披露がされていない例がいくつも記載されている。豪華な祝宴・披露をしても「式等ナニモナシ」としているのは夫婦盃などがなかったことを意味するのだろう。

🌸 記述のない交際と理解の可能性

全体を見ると、『記録簿』の記述内容に次のような特徴があることがわかる。

1. 葬送、婚姻については河和田全体についてほぼすべてを記録していると見られる。それらはほぼすべて香典や貰い物をあわせて記述している。
2. 婚姻の記述では、結納から嫁入りまでの時間の短さ、結納婿呼が明治の半ばに半数ほどおこなわれていること、婿呼びの重々しさ、披露の重視がわかる。ただし、昭和30年代初期までであった、不完全な嫁の引き移りの慣行や料理の内容を含めた地区の独特な披露の方法は伝えていない。
3. 出産・孫渡しはごく近い人についてのみ記述があり、河和田全体のものではない。年祝いも記録されているのは米寿だけである。盆・正月や他の節供の贈答記事は全くない。
4. 地区内や近辺の火災も見舞いや復旧援助を含めて記述されている。
5. 軍への応招・帰還、本願寺「参詣」、人の離村や帰村も餞別、土産、自宅への招待などとあわせて記述されている。
6. ただし虫害による不作、水害、耕地整理など重要事項は贈答と関係なく記述されている。

6以外はすべて贈答との関係で記述されている。坂井郡では年祝いが重視されず、記述が少ないのは当然のことである。子どもの成長の祝いは嫁の実家と婚家の間だけで行われるために記録が少ないのだろう。それにしても妹の子どもの初節供の記述もないのは不思議である。

結局のところ、『記録簿』は若い当主が公式の贈答・交際を記録し、頭分としての威厳や責任を守るために始まったものであろう。それだけに贈答の相手を必ず姓と当主名をあわせて示して、子孫が読むことにも耐えるようにしたが、やがて鉄道の開通や御真影の奉迎までが入り込むようになったものと考えられる。

『記録簿』は12年間、800余の項目を記述している。明治のものでかなり読み易いとはいえ、独特な癖字や当て字があって、全項目を正確に読むことは容易ではない。今回も婚姻の成立儀礼の一部に触れたに過ぎないが、カイチの交際、速夜組などとあわせてみれば、明治半ばのむらを理解する良い情報源になるものだろう。

(坂本 育男)

4月

- 24日(土)～6月6日(日)
春の企画展「祈りの音 遊びの音」(特別展示室)
- 24日(土)
三重県議会議員視察来館

5月

- 11日(火)
長浜市長浜城博物館職員資料調査来館

6月

- 3日(木)～22日(火)
「寺・宮大工大久保氏図案と図面」(エントランスギャラリー)
- 12日(土)～20日(日)
「登録文化財指定記念水野コレクション」(オープン収蔵庫)
- 17日(木)
福井県博物館協議会総会
- 23日(水)～7月2日(金)
燻蒸休館

7月

- 3日(土)～9月26日(日)
「函館五稜郭と越前赤瓦」(オープン収蔵庫)
- 17日(土)～8月31日(火)
夏の收藏品展「ふくい・夏のくらし」(特別展示室)
- 22日(木)
愛知県埋蔵文化財センター職員資料調査来館

8月

- 3日(火)～8日(日)
博物館実習
- 6日(金)
博物館運営協議会

9月

- 3日(金)
越前市職員資料撮影来館
大阪大学院生三田村家文書資料調査来館
- 10日(金)
越前市へ資料貸出

10月

- 1日(金)～11月30日(火)
「福井国体開会式 地元カメラマンの写真で振り返る」
(エントランスギャラリー)
- 16日(土)～11月23日(火)
秋の企画展「赤 古代の赤・江戸の紅花」(特別展示室)
- 19日(火)
福井大学工学部建築学科施設見学来館
- 23日(土)～12月28日(火)
「福井藩家老屋敷を掘る」(オープン収蔵庫)

11月

- 1・2・4・5日(月・火・木・金)
ふれあい文化子どもスクール見学来館
- 9日(火)～11日(木)
燻蒸室にて受入れ資料燻蒸
- 14日(日)
見学会「若狭の文化財」開催
- 15日(月)
文化庁主任調査官視察来館
- 17日(水)
福井大学学芸員課程見学来館
- 18日(木)
福井市橘曙記念館資料貸出

12月

- 4日(土)～26日(日)
バルーンクリスマスデコレーション設置
- 15日(水)～平成23年2月27日(日)
「卯年の年賀状 明治から昭和初期のデザイン」
(エントランスギャラリー)

1月

- 3日(月)～2月27日(日)
新春特別企画「ウサギ! キャラクター今昔」(特別展示室)
- 13日(木)
(株)福井放送テレビ取材来館
- 15日(土)～2月13日(日)
「姉川合戦図屏風と戦国の越前」(オープン収蔵庫)
- 20日(木)
福井市消防局消防査察来館
- 28日(金)
職員AED研修



バルーン
クリスマスデコレーション



春の企画展ライブ演奏